

## 遠くて近い国の友人たち

- 国際耕種の研修フォローアップ事業・パート 3

### 帰国研修員たちの活動と今後の課題

本邦研修を終えて帰国した研修員に対して、将来の支援や連携・共同事業化の可能性を探る目的でフォローアップ（追跡調査）をおこなった。前号につづいて、今回の調査で訪問した何人かの帰国研修員の活動紹介を通し、現況ならびに今後取り組むべき課題についてもう少し整理をおこなっておきたいとおもう。

世界各国から送られてくる研修員は普及員が多く、また試験場の研究員がふくまれるが、なかには講師としてカレッジで教鞭をとる立場のものもいる。今回訪問した帰国研修員のなかではザンビアからの研修員がそうしたひとりであった。日本の野菜研修で学んだことをこんどは教える側の講師として、NRDC (Natural Resources Development College) で毎年 140-150 名の学生を対象にトマトの育苗実習をおこなっていた。土づくりから育苗ポットによる健苗の生産までトマト栽培のコア技術の改善をめざして実地指導をおこなっていた。意欲的な彼は帰国後、職場にはたらしきかけ、トマト実習用の大型ビニールハウス施設を建設してもらったそうだ。施設内で、土にヤシ繊維やピートモスを混ぜたりして比較生育試験を実施していた。土壌成分などの分析機器があるといいのだがなかなか手がでないと笑いながら話していた。予算がなかなかつかないなかで、できることをできる範囲内で取り組もうとする姿勢に好感をもった。

マラウィでは、露地でのトマト生産はおもに雨季あけの時期が好適期のようなのである。農家にとってビニールハウスなど施設園芸は高価につくため露地栽培が一般的であるが、夏季にあたる雨季(10-3月)の過湿と冬季(7-9月)の低温が障害となっており、雨季あけの4-6月ごろに作つけが集中してしまう。一時期に作つけが集中すると過剰生産をまねき市場価格が暴落する。こうした生産の季節変動性、ひいては出荷時期を平準化することがマラウィのトマト生産の一大課題となっている。まず、生産技術面では、困難な雨季栽培の克服をはかる技術指導を帰国研修員たちがおこなっていた。具体的には簡易ビニールかけや殺菌剤の散布など JICA 筑波で習得した技術が活用されていた。また南部ブランタイアでは屋根つきのプラットフォーム(道の駅)

を建て売り場所の環境整備をおこなうマーケティング面での活動が試験導入されていた。さらに、別の研修員のアクションプランでは本人の転勤・異動でアイデア倒れになったが病院との契約栽培などで過剰生産を調整する動きをとろうと試みもあった。これらのマーケティング技術はすべて日本滞在中の実習での見聞がヒントとなって発案されたと聞いた。

このように、帰国研修員らの活動を個々に見てくると、各職場でさまざまな障害に面しながらも本邦研修で学んだ技術や考え方をさまざまな場面で活用しながら対処しようとしている姿が浮かんでくる。彼ら帰国研修員の知見をネットワーク化することで、現行の本邦研修の改善に結びつけていくことも可能になってくるであろう。われわれとしては、もう少し明確なネットワークとして、一定国内あるいは一定地域内で活動する日本びいきの彼らを有機的にたばねていき、相互の協力体制を構築することで将来技術協力プロジェクトを共同形成できないものかと模索している。これはいまだ小さな試みにすぎないであろう。しかし、近い将来いらかかたちになってきた時点であらためて報告できるのではないかと考えている。



苗生産場をバックに（ザンビアの NRDC）



プラットフォームでの野菜販売の試み  
(マラウィ・ブランタイア県)